

〔研究報告〕

思春期の子どもを夢を支える親の役割に関する研究 —母親を対象としたフォーカス・グループ・インタビューによる調査から—

菊原 美緒¹⁾ 松原まなみ²⁾

要 旨

本研究の目的は、思春期の子ども的人格的活力をもたらす「夢」に対し、親がどのように支えようとしているのかを知り、夢を支える親の役割を明らかにすることである。思春期の子どもを持つ親7名を対象に「お子さんの夢に対して親としてどのように支えようとしていますか。」の質問に対してフォーカス・グループ・インタビューを行った。逐語録の親の語りから子どもの「夢」を支える親の役割に注目し、その語りの意味内容に焦点を当て、重要アイテムを抽出し、さらに、重要アイテムが何を意味しているかを分析し、カテゴリに集約した。その結果、3つのカテゴリ「子どもの話を聴く」「自分の意見を言わない」「言葉で伝える」に集約された。子どもの「夢」を支えるための親に望まれる事は、思春期特有の心性と発達課題を理解した上で、将来の夢を語る子どもを否定せず耳を傾け、子どもの決定を承認するように接すること、必要な事は言葉で直接伝えるような対応が重要であることが示唆された。

キーワード：思春期、夢、発達課題、親役割、フォーカス・グループインタビュー

1. 緒 言

思春期の子どもは第二次性徴に伴う身体的変化や親からの心理的自立、アイデンティティの確立などの発達課題に直面する。心身の不安定を抱えながら成長・発達してゆく思春期の子どもは反抗的かつ攻撃的な態度を示しながらも親の保護環境から徐々に離れ、自立に向かって成長しようとする(李, 2013)。親は子どもが思春期になると学童期までは関わりやすかった子どもへの対応が急に難しくなったと覚えることがあり、中釜, 柏木(2011)は、親子関係の隠れた病理として、「愛情という名を借りた親による子どもの支配」、「親子間のパワー差と密室性」、「世代間伝達や暴力の連鎖」など、子どもの発達課題を理解しないまま子どもの自立を妨げるよ

うな親の対応が子ども的人格形成に悪影響を及ぼす実態を指摘している。

また、思春期の子どもを持つ親は40歳から50歳代の更年期にさしかかる年代に相当し、母親は自身の体調不良を抱えながらも、思春期の子どものいら感、もやもや感、孤独感に対応しなければならない。このように、思春期の子どもを持つ家族は発達危機を内包しており、それまで安定していた親子関係に変化が生じ、親は子どもへの関わり方を変化させることを求められる。子どもの発達課題に適切に対処できることは、親の役割を果たす上で重要であると考えられる。家族の発達危機に関しては、乳幼児期の子どもを持つ親に対する相談の場は増えてきてはいるが、思春期の子どもを持つ親への相談の場はあまり確立されていない(李, 2013)ことが指摘されており、思春期の子どもを持つ親の心理的課題と親の役割に関する研究はほとんどなされていない

1) 防衛医科大学校医学教育部看護学科

2) 関西国際大学大学院看護学研究科看護学専攻

い。

服部(2011)は、「思春期という自己に目覚め、自己中心性と孤独感のはざままで不確実であいまいな状態を生き抜く時に、自己の将来像を夢見ることは人格を陶冶する。夢を持つ若者の方が持たない若者よりもはるかに健康な発達課題をたどる。思春期の子どもの発達を促す活力となるのは「夢」であり、将来を夢みることは、思春期にある子どもの自己のめざめを促し、人格を活性化する人格的活力(Virtue)になる」として、思春期における「夢」の重要性を示している。服部(2011)のいう「人格的活力(Virtue)」とは、エリクソンの示した心理的発達概念に基づく基本的な人間の強さのことである。通常「徳」と翻訳されることが多いが、服部(2011)は、「人格的活力」という日本語の方が真意に近いとして、思春期に抱く「夢」こそが人生に活力(人格的活力)を与えるもの、価値あるものの魂(徳)であり、人間の人生周期を通じて人格を力強く組織づけ、よりよく生きていくための最良の倫理であると主張している。

本研究の目的は、思春期の子どもが抱く将来の夢に対し、親がどのように支えようとしているのかを知り、夢を支える親の役割を明らかにすることである。これは、自立と依存の間を揺れ動く思春期の子どもの発達を促し、子どもが発達していく上で必要な人格的活力を支えるという親の役割を明らかにすることにつながる家族看護上の重要なテーマであると考えられる。

II. 研究方法

1. 用語の定義

1) 本研究における思春期とは、服部(2011)が示した発達段階に従い、12歳から18歳までの子どもを対象とした。

2) 本研究で扱う「夢」とは、服部(2011)のいう思春期の人格的活力である夢を指す。思春期の子どもが自己中心性対孤独感の葛藤を生きる中で、自分

の未来を夢見ることを人格的活力として生きてゆく夢、具体的には自分になりたい自己の将来像、将来の希望、進学や就職について自分がしたい事などの具体的な将来像のほか、漠然とした自己イメージも含む自分の未来像として定義した。

3) 「親の役割」とは「親-子において、親として親らしくふるまうように期待されている行動」であり、本研究で扱う「子どもの夢を支える親の役割」とは、親が思春期にある自分の子どもの夢を認識し、その夢に対して親としての姿勢・態度を持ちながら、子どもの夢を支えるという親の役割を果たすために具体的な行動として現れるものと定義した。

4) 本研究でいう親の「認識」とは、今ここで、目の前の自分の子どものことをどのように理解しているか、「姿勢・態度」とは、親が自分の子どもに向き合う時の心の構え、基本的な考え方とした。

2. 研究方法

1) データ収集方法

本研究では、思春期の子どもを持つ親に対して、単に親個人の意見としてだけでなく、子どもの将来についての心配や、思春期特有の関わりに苦慮している親仲間の中で共有化された意見としてデータを収集することを目的として、フォーカス・グループインタビュー(以下FGIとする)の手法を用いた。FGIには習熟が必要なため、インタビューは事前にFGIの訓練を重ねた上で本調査に臨んだ。インタビューはメインインタビュー、サブインタビュー、観察者3人の役割分担のもとで実施した。インタビュー内容は、1) お子さんが将来についてどんな夢をもっているか話したことがありますか、2) お子さんの夢に対して親としてどのように支えようとしていますか、の2点である。インタビュー内容は参加者の承諾を得たうえで、ICレコーダーで録音すると共にDVDカメラで対象者の様子を記録した。インタビュー時間は90分とし、終了後に、対象者の属性に関するフェイスシートとインタビューの感想の記入を依頼した。

インタビューは2014年7月に実施した。

2) 対象者

A中学校長に本研究の目的、方法、意義、対象者の保護（プライバシーの保護、調査の中断・発言の自由の確保、結果公表時の個人情報保護）について書面を以って説明し、同意を得た後、保護者の代表者に研究参加同意書の内容を説明し、同じ中学に通う子どもを持つ親を集めてもらい、同意を得られた者を対象とした。

3) 分析方法

録音したインタビュー内容から逐語録を作成した。逐語録の分析にあたっては対象者が表現した内容に注目し、言葉を生データとして活用するという安梅（2007）の分析法に基づき、以下の手順によって実施した。

(1) 逐語録に対応するFGI場面の映像から対象者の反応（表情・動作など）を確認し、逐語録に併記する。

(2) 分析にあたっては、本研究における用語の定義に基づいて、4名の研究者それぞれがあらかじめ逐語録を確認し、本研究で定義した「子どもの夢を支える親の役割」即ち、親が子どもを（あるいは子どもが抱く夢を）どのようにとらえ、どのような姿勢や態度で子どもに対応し行動しているのかに該当する親の語りの部分を逐語録から重要アイテムとして抽出した。

(3) 抽出した重要アイテムの意味する内容を忠実に読み取って分析し、1文1内容にコード化した。

(4) コード化した内容をサブカテゴリ化し、さらにカテゴリに集約し分類を行った。

(5) カテゴリとして抽出された内容と対象者の背景との関連性を検討した。

(6) 信頼性と妥当性を確保するため、小児看護・母性看護領域の研究者4名で分析を行った。各研究者が自分自身のとらえ方に固執してしまわないように、生データに何度も戻り、それが何を意味しているのかに焦点を当て結果の分析を進めた。分析過程では、客観的な説明ができることを最も重視し、各サブカテゴリ、カテゴリの内容や基準を常に研究者

間で確認して分析を進めた。

4) 倫理的配慮

対象者は、知己の集団の中で、自己の内面に対するインタビューを受けることになり、戸惑いを感じたり、話したくない内容があることにより不快に感じる場合が起こりうることから、いつでもインタビューを中止できる事を保証した。また、ICレコーダーやDVD撮影による心理的圧迫感や負担が生じる場合も考えられるため、インタビューを行う際にはリラックスできるような環境を整えるよう最大限に配慮した。インタビュー内容の逐語録については、対象者個人の匿名化を守り個人が特定される部分は記号におきかえ、プライバシーの保護を厳守した。本研究は研究者の所属する大学院の倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号H25-018）。

III. 結果

1. 対象者の背景

当初、2グループ15名のFGIを予定していたが、保護者の1人がグループ・インタビューのメンバー辞退の意思を表明したため、結果的にA中学校（公立）の保護者7名1グループにFGIを実施した。父親と母親の区別をせずに協力を依頼し、同意が得られたのはすべて母親で年齢は40代前半から50代前半、平均47.3歳であった。職業は、専業主婦4名、パートタイム3名。家族構成は拡大家族2組、核家族5組で、ひとり親家庭はなかった。子どもの数は、2～3名、平均2.7名。そのうち思春期の子どもは1～2名であった。

FGIの映像では、発言が特定の人に偏ることなく、メンバーが自由に和やかな雰囲気の中で話している様子が確認された。また、FGI終了後の感想に「色々な話が聞けて、参考になった。このような体験をして良かった」「インタビューに参加して話すことができ、子どもとの関係を改めて考える機会になった」という記述から、対象者たちはFGIの中で日常の親子関係を振り返り、思春期の子どもを

持つ親同志のピアな関係の中で、親の役割を語り合い、さまざまな親の思いを表出していたことが確認された。

2. 子どもの夢を支える親の役割

子どもの夢を支える親の役割に注目して重要アイテムを抽出する過程で、親が思春期の子どもをどのように理解しているかという親の「認識」と、子どもに対する親の「姿勢・態度」が親の「行動」に影響していること、さらに、この背景には、親の年齢・発達段階・生育歴・家族構成・子どもの状況といった親個人の背景が影響しているという構造が浮かび上がってきた。そのため、再度、生データに立ち戻り、親が思春期の子どもをどのように「認識」しているか、子どもに接する際の「姿勢・態度」な

ど、親の「行動」に影響している要因についても着目し、重要アイテムとして抽出した。その構図を図1に示す。

以下、この構図に基づき、親の具体的な語りの内容を示しながら子どもの夢を支える親の役割について分析結果を記述する。

親の語りから子どもの夢を支える親の役割として、42の重要アイテムが抽出され、集約する過程で最終的に13コードが抽出された。それらは意味内容のまとまりから5つのサブカテゴリに集約され、さらに3つのカテゴリに分類された。子どもの夢を支える親の役割は、1) 子どもの話を聴く、2) 自分の意見を言わない、3) 言葉で伝える、の3つのカテゴリに集約された(表1)。

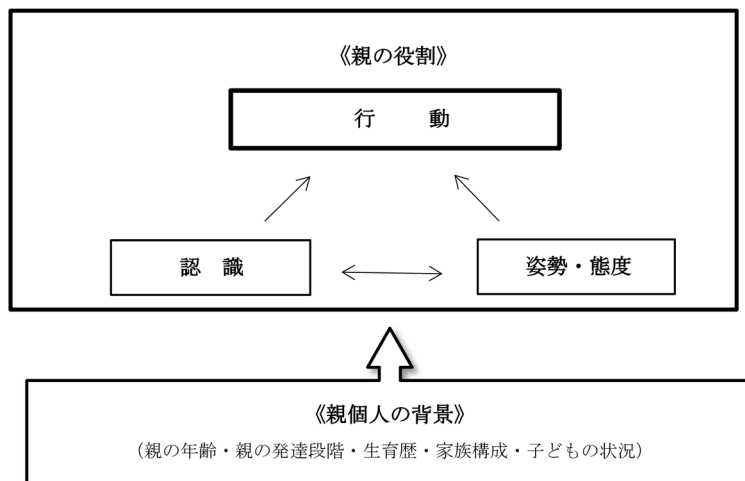


図1. 子どもの夢を支える親の役割

表1. 子どもの夢を支える親の役割

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
子どもの話を聴く	【子どもの話をそのまま聴く】	〈子どもの話を碎かずに聴く〉 〈子どもと同じような立場に身を置いて話を聴く〉
	【子どものしたい事を聞き、話を聴く】	〈子どものしたい事をとりあえず言うように促し、話を聴く〉 〈子どものしたい事の原因を聞いて、可能なことはさせてあげる〉
自分の意見を言わない	【あえて自分の意見を言わない】	〈頭ごなしに自分の意見を言わない〉 〈自分の意見を言わずに様子を見る〉
言葉で伝える	【子どものしたい事を支持することを言葉で伝える】	〈子どもに選択を促し、支持することを言葉で伝える〉 〈子どもが選択した事を支持し、応援することを言葉で伝える〉 〈子どもが将来のめざすものに向かうように言葉で伝える〉 〈子どものしたい事を批判しないで、自分のわかる範囲のことを言葉で伝える〉
	【子どものしたい事に関する情報を言葉で伝える】	〈子どもが関心を持った職業について答えられる範囲で答えて、情報を言葉で伝える〉 〈進路に関する話題の中で、きょうだいの話に情報を付加し、言葉で伝える〉 〈子どものしたい事に対して、自分の知っている情報を精一杯、言葉で伝える〉

実際に語られた内容は斜字、重要アイテムである具体的な行動は二重下線で、認識または姿勢・態度は、下線で示す。カテゴリは「(太字)」で示し、サブカテゴリは【 】、コードは〈 〉で示す。

1) 子どもの話を聴く

カテゴリ1)の「子どもの話を聴く」は【子どもの話をそのまま聴く】と【子どものしたい事を聞き、話を聴く】の2つのサブカテゴリから構成された。サブカテゴリの【子どもの話をそのまま聴く】は、〈子どもの話を砕かずに聴く〉と、〈子どもと同じような立場に身を置いて話を聴く〉の2つのコードから構成された。また、サブカテゴリの【子どものしたい事を聞き、話を聴く】は、〈子どものしたい事をとりあえず言うように促し、話を聴く〉と、〈子どものしたい事の原因を聞いて、可能なことはさせてあげる〉の2つのコードから構成された。

(1) 【子どもの話をそのまま聴く】

① 〈子どもの話を砕かずに聴く〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

あたし達から見たら恵まれていると思っても自分(子ども)たちの中で足りないものがいっぱいあって(認識)。だから、それ(ゲームなど)が話すきっかけになって(姿勢・態度)話をね。話をする時に砕かずに聴く(行動)。(対象者E)

〈子どもの話を砕かずに聴く〉際、親はゲームなどの子どもが好きな事を媒介として共通の楽しみを持ち、子どもと話すきっかけをつくっていた(姿勢・態度)。さらに、子どもの気持ちに寄り添うように接し(姿勢・態度)、話をする時には子どもの話を砕かずに丸ごと聴くようにしていた(行動)。

② 〈子どもと同じような立場に身を置いて話を聴く〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

小さな夢から大きな夢までいっぱいあるみたいなんですけど、自分の中でできるできないというのを決めている(認識)みたいですね。それはこう聴く。親としてはこう聴く。私もアドバイスとかはできない(行動)ので、私も夢の途中なのでお互い夢をめざそうね みたいな感じで…(姿勢・態度)。

(対象者F)

〈子どもと同じような立場に身を置いて話を聴く〉際、親は子ども自身で現実の道を探し、夢の可能性や限界を決めていると子どもの様子を認識していた(認識)。また、親としては「私も夢の途中なのでお互い夢をめざそうね」と一緒に夢をめざす同志のように対応し(姿勢・態度)、アドバイスはしないで子どもの立場に近づこうとして、話を聴いていた(行動)。

(2) 【子どものしたい事を聞き、話を聴く】

① 〈子どものしたい事をとりあえず言うように促し、話を聴く〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

うちにはお金がないんで、そんな贅沢をしちゃいけないことがあって、できなかったし、遠慮をして言わなかったんですね(親個人の背景)。だから、私は「こんな(こんなことを)したい、やりたいことがあったら、とりあえず言ってみて」って、で、「できるときはできるようにするし、できないときには、もう、できないって言うから」って…(行動)(対象者B)

〈子どものしたい事をとりあえず言うように促し、話を聴く〉際、親は自分が思春期の頃にされて嫌だったことや寂しかったことは、子どもに対してできるだけしないように心掛け(姿勢・態度)、自分のできる範囲内で子どもの夢を支援する姿勢を子どもに示していた(姿勢・態度)。そして子どものしたいことを「とりあえず言ってみて」と話すように促し、子どものしたい事を引き出し、話を聴いていた(行動)。

② 〈子どものしたい事の原因を聞いて、可能なことはさせてあげる〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

「どうして、そういうふうに言うの」って訳を絶対聞きます(行動)。それで、私が納得したら「じゃあ、いいよ」って。「私が納得できるんだったらいいよ」って、聞くと私は納得するからですね。「じゃあ、わかりました」(姿勢・態度)みたいな風

にしています。いつも理由をちゃんと聞く(行動)。もう聞かないとあれだから、聞いて「あーわかった」…。(姿勢・態度)(対象者E)

〈子どものしたい事の理由を聞いて、可能なことはさせてあげる〉際、親は子どもなりの理由を聞き、それに自分が納得したら、「じゃあ いいよ」と承認する対応(姿勢・態度)をしていた。この対応には、きょうだいに障害があるという理由で、子どもがしたい事ができなくなるのを自分自身が後悔したくないという思い(親個人の背景)が影響していた。そして、子どものしたい事やその理由を聞いて、可能なことであればさせてあげるようにしていた(行動)。

このように、最初のカテゴリの「子どもの話を聴く」とは、子どもの話を否定せずに受け止めてそのまま聴くこと、そのために、親は子どもの好きなことを媒介として話題を引き出し、そこから子どもの気持ちに寄り添うような態度で話を聴いていた。また、親は子どもの話を聴きながら、子どもの成長・発達を感じ、子どもが自分と異なる個体であることを認識し、子どもの発達段階に合わせて距離をとったり、子どもと同じ立場で自分自身の夢を子どもと語り合ったりする行動が見られた。

2) 自分の意見を言わない

カテゴリの「自分の意見を言わない」のサブカテゴリは、【あえて自分の意見を言わない】であり、これは2つのコード〈頭ごなしに自分の意見を言わない〉と、〈自分の意見を言わずに様子を見る〉で構成された。

【あえて自分の意見を言わない】

① 〈頭ごなしに自分の意見を言わない〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

彼は、本当に学習以外は、いろんなことに興味があり、食事(料理)も、すごくって自分で創作料理をバンバンつくって…「でも、仕事にしたら俺の料理はダメだ」とか言って…。で、今「パソコンの方がやりたい」って(認識)。だから、うちも「頭ごなしになるべく言うまい」って(行動)してい

る…。(対象者F)

進路について、親は、その子どもを信頼して子どもが夢に向かうために具体的に考えている方法を尊重する姿勢で対応しており(姿勢・態度)、自分の意見は、なるべく頭ごなしに言わない(行動)ように心がけて行動していた。

② 〈自分の意見を言わずに様子を見る〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

「私は(今日は塾に)行かない」みたいな。自分で決めているから。(認識)それなら、「まあいいよ。じゃあ、頑張んなさい」って。「その代り夏期講習とか全部頑張ってるね」という感じで…。…大丈夫なのかなって思いつつ、不安だけれども…様子を見つつ、もう何も言わないですね(行動)。(対象者E)

親は、子ども自身が決めたことに対して意思が強固であると認識し(認識)、親としては大丈夫なのかと不安を抱えながらも、様子を見ながら、あえて自分の意見は言わないという行動をとっていた(行動)。

このように2つ目のカテゴリである「自分の意見を言わない」とは、親は子どもの行うことに対して本当は心配で助言をしたいのだが、子どもの様子を観察しながらも、親は、自分の気持ちを抑えて干渉しないように心がけていた。自立心が強い子であることや、子どもが自分のポリシーを持っていることなどの子どもの特徴を認識し、また、日頃の様子から、子どもなりの方法で努力していることを認め、色々と言いたい気持ちを抑えて、子どもの思いを尊重し、子どもの決定を承認する姿勢・態度で対応していた。また、思春期の子どもの自立と依存の葛藤のはざまですら様子を見ながら、親としての心配な気持ちを抱えつつ、自分の意見は控えて、子どもの様子を見ながら、あえて自分の意見は言わないなどの行動をとっていた。

3) 言葉で伝える

カテゴリの「言葉で伝える」は【子どものしたい事を支持することを言葉で伝える】と【子どものしたい事に関する情報を言葉で伝える】の2つのサブ

カテゴリで構成された。さらにサブカテゴリの【子どものしたい事を支持することを言葉で伝える】は、〈子どもに選択を促し、支持することを言葉で伝える〉、〈子どもが選択した事を支持し、応援することを言葉で伝える〉、〈子どもが将来のめざすものに向かうように言葉で伝える〉、〈子どものしたい事を批判しないで、自分のわかる範囲のことを言葉で伝える〉の4つのコードから構成された。

次に、サブカテゴリの【子どものしたい事に関する情報を言葉で伝える】は、〈子どもが関心を持った職業について答えられる範囲で答えて、情報を言葉で伝える〉、〈進路に関する話題の中で、きょうだいの話に情報を付加し、言葉で伝える〉、〈子どものしたい事に対して、自分の知っている情報を精一杯、言葉で伝える〉の3つのコードから構成された。

(1) 【子どものしたい事を支持することを言葉で伝える】

① 〈子どもに選択を促し、支持することを言葉で伝える〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

「あなた達はこの部分とはとにかく我慢しないといけな…、でもこの事では、じいちゃんからごちよごちよ言われるものじゃないので、好きにしていんだよ」って(親個人の背景)。「この部分でいいよ。あなたの持っている時間で好きなようにしていいよ」って言う(行動)。「じゃあ、これしようかな。あれしようかな。」っていうふうになるから、どこかで制限がかかる分、自由な時間ができたら、「これしよう」って。「今しかできん」というふうになるのかな(認識)と思います。(対象者B)

祖父母と同居のため、子どもがしたい事が制限されることがあり、子どもに我慢をさせる状況(親個人の背景)があり、そういった中でも、親は「好きなように…」としたい事を子どもに選択させ、そのことを支持するように関わっていた(姿勢・態度)。

② 〈子どもが選択した事を支持し、応援することを言葉で伝える〉の具体的な内容は、以下の語りで表

現された。

うちは、すごく自立心が強いので、「私はこのあたりで一番いい学校に行く」って言ったんですね。(認識)。…勉強していると道は開けると自分(母)は思っているからですね。自分(子ども)が、こうって決めたら、全然聞かないから…。それなら、「まあいいよ じゃあ 頑張んなさい」って(行動)。(対象者E)

子どもは、自立心が強く将来の事を自分で決めており、さらに、目標を持ち勉強していると親は認識していた(認識)。また、親自身も勉強していれば道は開けると思い、子どもの決定を支持する姿勢で接し(姿勢・態度)、「まあいいよ 頑張んなさい」と応援することを言葉で伝えていた(行動)。

③ 〈子どもが将来のめざすものに向かうように言葉で伝える〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

「そこに(建築家) 行くための道っていろんな道がある、落第は困るからストレートでどこかに行ってもらうけど、行けなかった時には専門学校でも、下働きの大工さんの所に入り込んでの住込みでもいいから(姿勢・態度)、後は、自分で、その目的に向かってやりなさい」って、今、言っている(行動) ところです。…「僕ね、大工じゃなくってね、公務員になる。」って言ってきたんですよ。そう言い出したので「じゃあ、それはそれ(大工塾をやめて公務員になる)でどうぞ好きに」と(行動)。(対象者B)

親は、子どもがなりたい職業に就くための方法(どのような進路を選ぶか)は問わずに、どのような方法でもいいからという肯定的な姿勢で子どもの夢に寄り添うように接していた(姿勢・態度)。子どもが、目的に向かって、目標とする職業に向かうように声をかけ、言葉で伝えていた(行動)。

④ 〈子どものしたい事を批判しないで、自分のわかる範囲のことを言葉で伝える〉の具体的な内容は、以下の語りで表現された。

私は、本当ならば親であれば、こういう事を聞いて

てやって、アドバイスをしなければならぬのだろ
うけれど、私の方がアドバイスされていて (認識)。
この子が言う事に対して、もう、こちらが批判をす
るような状況じゃなくなった (姿勢・態度) んです
ね。そういう中で、「あれしたい。これしたい」っ
て言った時に、自分のわかる範囲のアドバイスをし
て… (行動)。 (対象者C)

親は、親として子どもの話を聴き、アドバイスを
しなければならぬと思っていたが、逆に、子ども
からアドバイスをされることがあり、今は、もう、
自分が子どものことを批判するような状況ではなく
なると認識していた (認識)。よって、子どもか
らの色々なしたい事に関する発言に対して批判をし
ないような姿勢で接し (姿勢・態度)、自分がわか
る範囲のアドバイスを言葉で伝えていた (行動)。

(2) 【子どものしたい事に関する情報を言葉で伝え
る】

① 〈子どもが関心を持った職業について答えられる
範囲で答えて、情報を言葉で伝える〉の具体的な内
容は、以下の語りで表現された。

食事中にテレビは、本当は、よくないんでしょ
うけれど、例えば、あの職業はどういうようなこと
でとか、この人はどういう仕事で、どういう勉強をす
るのだろうかということ (姿勢・態度) を口にした
時には、できるだけ私が答えられる範囲で答えるよ
うにしている (行動) ということです。 (対象者H)

中学生になったら子どもは自分の現実がわかり、
同時に、夢についてはわからないという言い方をす
るようになったと親は認識していた (認識)。そこ
で、親は、自分から子どもの夢を引き出すような媒
介 (テレビ) を使って、話のきっかけを作り (姿
勢・態度)、子どもが関心を持って口にした職業に
関する情報について、答えられる範囲で答え、言葉
で伝えていた (行動)。

② 〈進路に関する話題の中で、きょうだいの話に情
報を付加し、言葉で伝える〉の具体的な内容は、以
下の語りで表現された。

姉が、具体的にわかっているんで (認識)、下の

子に、こういう専門学校だったら、こういうのと
か、大学のこういう学部はどうだろうかということ
は、姉の方が、こうやってくれるんで (姿勢・態
度)。それに対して、ちょっとプラスアルファで
伝える (行動) っていう事がありますけれども…。
(対象者G)

親は日頃から、子どもは進路の事についてきょう
だいと話をすることが多く、きょうだいから具体的
な助言をしてもらっていると認識していた (認識)。
よって、自分は、きょうだい等の家族と共に子ども
を支援するように関わり (姿勢・態度)、進路に関
するきょうだいの情報に付加 (プラスアルファ) す
る形で、情報を言葉で伝えていた (行動)。

③ 〈子どものしたい事に対して、自分の知っている
情報を精一杯、言葉で伝える〉の具体的な内容は、
以下の語りで表現された。

「こういう事がしたいんだ、ああいう事をした
いんだ」っていう事 (認識) を、それに行きたかった
ら、ここは、ちゃんとしていなければならないとい
う、自分の知っている情報を最大限に活かして話を
して… (行動)。 (対象者B)

同居する祖父母からの影響により、子どもは、し
たい事に対して制限されることが多く (親個人の背
景)、そのような状況の中でも、親は子どものした
い事があると認識し (認識)、それを応援するよう
に関わっていた (姿勢・態度)。また、子どものし
たい事に関して自分の知っている情報を最大限に活
かして、精一杯、言葉で伝えていた (行動)。

このように、3つ目のカテゴリである「言葉で伝
える」においては、親は、子どもの夢を支える気持
ちを、子どもに伝わるようにわかりやすく表現して
言葉で伝える行動をとっていた。そして、子どもの
したい事を尊重し、承認する姿勢・態度で対応し、
子どもの選択やしたい事を応援することを言葉で伝
えていた。また、大人の日線 (視線) で批判をしないで、子
どものしたい事を支持することや、自分のわかる範
囲で、子どものためになる情報を精一杯、言葉で伝
える行動をとっていた。また、将来の進路に関する

情報に関し、他のきょうだいのアドバイスなどに付加する形で自分なりの情報を伝えていた。進路の選択の決定は子ども自身にあるが、その選択に必要と思われる情報を伝え、さりげなく、その時々の子どもの状況に合わせて家族と共に支える行動が見られた。

IV. 考 察

1. 子どもの夢を支える親の役割

FGIによる親の語りから子どもの夢を支えるための親の役割として、「子どもの話を聴く」「自分の意見を言わない」「言葉で伝える」の3つのカテゴリが抽出された。以下、思春期の子どもが抱く将来の夢を支えるための親の役割について、カテゴリ別に考察する。

1) 子どもの話を聴く

このカテゴリには【子どもの話をそのまま聴く】【子どものしたい事を聞き、話を聴く】の2サブカテゴリが含まれた。

これは、注意を払ってより深く、丁寧に耳を傾けることであり、親は、まさに、「傾聴」の姿勢で、子どもの語りを聴いていたといえる。また、子どものしたい事を「とりあえず言ってみて」と促す行動であり、受動的ではなく、能動的に話を聴く行動として示された。

鷺田(2015)は、「聴くこと」について「ことばを受けとめることが、他者の自己理解の場を劈くということ」と説明している。安永、須藤(2014)は、「傾聴により、自分の話を真剣に聞いてもらうことで高揚感を感じ、もっと話したくなる。そればかりではなく、自己効力感を高め、自己の内面を見つめることができる」と述べている。

このように、うなずいたり、オウム返しをしながら、丸ごと話を聴くことで、その場を共に過ごしている親と子の間で相互作用が働き、子どもは夢についての思いを素直に話して、自分の将来像を肯定的に捉えることができるようになるのではないかと考

える。

2) 自分の意見を言わない

このカテゴリには【あえて自分の意見を言わない】の1サブカテゴリが含まれた。

【あえて自分の意見を言わない】のサブカテゴリは、子どもの将来の計画やそのための方法について、子どもなりの理由やポリシーを持っていたり、子どもが夢に向かう方法を決めている時には、親は、子どもを信頼して、その決定を承認するような姿勢・態度で接するようしていた。そして、親は心配をしながらも子どもを見守り、過度な干渉をしない姿勢・態度で対応し、〈頭ごなしに自分の意見を言わない〉で、〈自分の意見を言わずに様子を見る〉ように行動していた。

李(2013)は、「自分の期待通りに、子どもを支配しようとする親は、「～させた」「～させる」と、操り人形のように親の意思で子どもの進路を決めてしまい、その結果、子どもの人生は親の願望に支配されてしまうことになる。親は自分の意見を押しつけるのではなく、子どもの主体性を尊重して意見を聴くというように、子どもへの関わり方を対等なものへと変化させていくが必要になる。親が、子どもを別人格として尊重しなければ、子ども自身の主体性が育つことは難しい。思春期以降、親は徐々に子どもの自主性に任せて見守り、後方支援に徹していく必要がある。」と述べている。

頭ごなしに自分の意見を言わないことや、自分の意見を言わずに様子を見るという行動は、親にとっては自分の気持ちの中に葛藤を抱えることでありながら、自分とは別の人格として、子どもの意思や判断を尊重し、子どもに決定を委ねること、子どもの自主性に任せて見守り、干渉しないことである。これは、親の役割は後方支援であると認識しての行動であると考えられる。思春期の子どもの自立と親離れは、親にとっては大きな喪失感を伴う出来事ではあるが、思春期の子どもの心性や、発達段階を踏まえた行動であり、子どもの夢を支えるための親の役割を意識した行動であると考えられる。

3) 言葉で伝える

このカテゴリには【子どものしたい事を支持することを言葉で伝える】【子どものしたい事に関する情報を言葉で伝える】の2サブカテゴリが含まれた。

本研究で、親は、子どもの選択や目標に向かう方法を肯定的に支持し、わかりやすい言葉を用いて承認の言葉で伝えていた。子どもを支持する親の思いは、口にしないで思っているだけでは伝わらない。だからこそ、その思いを言葉で伝えることで、良好なコミュニケーションとなり、親から子どもへのメッセージが一貫したもの、あるいは一致したものになっていたと考えられる。言葉で伝えることにより、子どもは親に受容されていることを、よりはっきりと自覚できるようになり、また、子どもが夢に向かって進む活力を与えることになると考える。また、子どもの夢を支えることにつながる情報を言葉で伝える行動を示していた。具体的には、親は子どもが関心を持った職業について答えられる範囲で答えたり、進路に関する話題の中で、きょうだいの話の内容に情報を付加した形で、言葉で伝えたり、子どもがしたい事に対して自分の知っている最大限の情報を精一杯、言葉で伝えるなどの行動などが見られた。時には、テレビの場面などを通じて、将来の夢に関する話題のきっかけをつくり、将来の職業や進学について、子どもの関心や興味を引き出し、自分以外の家族と共に支える姿勢で対応していた。これは、親の夢を押し付けるのではなく、子ども自身で将来のことが決定できるようにするための情報を提供していたと考える。そして、親は、自分の生育歴や、同居による制限を受けてきた体験などの親個人の背景に起因する状況に対して、さまざまな圧力から子どもを守る行動をとっていたと考える。

森山(2003)は、思春期の子どもがいる家族の発達課題として「思春期の子どもが物理的に親に依存しながらも心理的に独立を求めることによる親子関係の変化に対応する必要がある」と述べている。親はこの変化のスピードについていけず、子どもとの新たな距離感を模索し、戸惑いや葛藤を抱えがちに

なり、危機的状況に陥りやすい。このような危機的状況に直面し、家族看護では、不均衡状態になった家族の均衡回復への支援を行う。「家族は一つのシステム＝ケアユニット」であり、家族全体を視野に入れたアプローチをする必要がある。ストレスフルな状況に対し、家族が支え合うことによって、より大きな力となる。さらに、家族の健康に携わる看護職者として、家族を孤立させず、地域の中で家族としての責任が果たせるように、家族の力を最大限に引き出すことができるような働きかけが必要である。

本研究において、対象者である親たちは子どもの夢について、話を丸ごと聴き、あえて自分の意見を言わず、情報を伝えたり、子どもの選択を支持する言葉で伝えるというように、思春期にある子どもが自分の将来像を肯定的に捉えることができるような聴き方、伝え方に配慮しながら、子どもたちが抱えている「夢」を支えようとしていた。これらの親の役割は服部(2011)が示した人格的活力を育むことにつながっていくと考える。本研究で明らかになった親の役割は、思春期の子どもを持つ親が子どもの発達課題に適切に対処するための指針になり得ると考える。

2. 夢を支えるための親の役割とそれに影響する要因

親の語りを分析する過程で、子どもの夢を支える親の役割に影響する要因として親の認識および姿勢・態度と、それらが相互に関連し合っただけで示される親の行動に親個人の背景が影響しているという構図が明らかになった。FGIの語りの中で親たちは、子どもの特徴やその時々の子どもの状況を認識し、子どもと同じ目線で気持ちに寄り添い、時には距離をとったり、思春期という子どもの発達段階を踏まえ、大人目線の批判をせず、子どものしたいことを尊重し、支持する姿勢・態度で接していた。さらに対象者の中には家族の経済状況や他の家族メンバーから受ける制約がある中でも、可能な限り子どもの夢が実現できるよう配慮したり、親自身が子ども時代に果たせなかった思いを重ねて、子どもが同じ思いをしないようにという配慮が親としての対応に影響している者もいた。

このように思春期の子どもを持つ親は、それまでの親子関係や自身の体験などの親個人の背景を土台とし、子どもの特徴やその時々の子どもの状況を認識し、子どもの主体性を支持する姿勢・態度をもって行動し、子どもの夢を支えるための役割を果たそうとしていた。

3. 「本研究の限界と今後の課題」

本研究では、A中学校に通う子どもの親という限定したグループを研究対象者としたこと、その人数が7名であったことから、抽出された親の役割は、限られたものである可能性は否定できない。本研究結果を普遍化するにはさらにFGIを重ねて対象数を増やすこと、対象特性の異なるグループに、インタビューを行うことが必要であると考えられる。

本研究で実施したFGIの中で、親同志が語りあえる場があることによってお互いを支え合い、エンパワメントされることが示された。思春期の子どもを持つ親が孤独に一人きりで思い悩むのではなく、このような語り合いの中で、思春期の子どもを持つ親たちが悩みを共有し、忌憚なく語り合い、傾聴し、お互いにミラーリングすることで、思春期の子どもに対する親の姿勢や態度をメタ認知し、どのような行動をとった方がいいのかという親の役割についてのヒントが得られる効果が認められたことは本研究の副産物であったと考える。思春期の子どもを持つ親の支援には、このような場を設けることが有効であると考えられる。

本研究結果に基づき、思春期の子どもの特性と親の役割を理解し、このような支援の場を設けることや、その効果について研究を進めていきたい。

V. 結 論

本研究では、思春期の子ども「夢」を支えるための親の役割を明らかにするために、思春期の子どもを持つ親に対して、FGIを行った。その結果、子どもの「夢」を支える親の役割は、「子どもの話を

聴く」「自分の意見は言わない」「言葉で伝える」の3つのカテゴリに集約された。また、親が思春期の子どもをどのように認識しているのかという親の認識と、子どもに対する親の姿勢・態度が、子どもの夢を支えるための具体的な行動に影響していることが示された。

以上、子どもの「夢」を支えるために親に望まれる事は、自立と依存の葛藤にゆらぐ思春期特有の心性と、親からの心理的自立やアイデンティティの確立という思春期の発達課題を理解した上で、将来の夢を語る子どもに対し、子どもの話に耳を傾け、子どもが受容されていると感じることかできるようにすること。また、干渉しないで見守り、子どもの決定を承認するように接すること。そして、自分の思いを子どもにわかりやすい言葉で伝えることなど、子どもの状況に合わせて、親の役割を変化させ、対応をすることが重要であることが示唆された。尚、本研究における利益相反はない。

謝 辞

修士論文をまとめるに当たり、S大学MM先生、TT先生のご指導を頂いた。ここに深謝申し上げます。

{ 受付 '18.04.03 }
{ 採用 '19.05.29 }

文 献

- 安梅勅江：ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法—，医歯薬出版株式会社，東京，2007
- 服部祥子：生涯人間発達論 人間への深い理解と愛情を育むために（第2版），2-17, 92-107, 144-159, 医学書院，東京，2011
- 李 敏子：思春期の子どもを持つ親への支援，相山臨床心理研究，(13)：3-6, 2013
- 森山美知子編集：ファミリーナーシングプラクティス 家族看護の理論の実践（第3刷），83-116, 92-93, 医学書院，東京，2003
- 中釜洋子，柏木恵子編著：親子関係の隠れた病理 よくわかる家族心理学，186-187, ミネルヴァ書房，京都，2011
- 鷺田清一：「聴くことの力」臨床哲学試論，14-15, ちくま学芸文庫，東京，2015
- 安永 悟，須藤 文：LTD話し合い学習法，72-74, ナカニシヤ出版，京都，2014

Examining Parental Roles in Supporting the Realization of Adolescent Children's Dreams Via Focus Group Interviews with Mothers

Mio Kikuhara¹⁾ Manami Matsubara²⁾

1) National Defense Medical College Division of Nursing

2) Kansai University of International Studies School of Health Sciences Department of Nursing

Key words: Adolescence, Dream, Developmental task, Parental role, Focus group interview

The aim of this study was to clarify parents' roles in supporting their children's "dreams" —which brings about personal strength in their all life stage via focus group interviews with mothers. Seven mothers with adolescent children were asked questions such as "What kind of support do you give as a parent for your child's dream?" From the verbatim records of the interviews, portions of the parents' narratives that related to how parents supported their child's dream were extracted and coded, which were then used to derive categories. Parents' efforts to support their children's dreams were summarized into three categories: "listen to children's stories", "do not give their own opinions", and "communicate through words". For parents to effectively support adolescent children's dreams, they must understand their children's psychological idiosyncrasies and development tasks and listen to their children talk about their dreams. In addition, parents must be willing to accept children's decisions and to convey the necessary information in appropriate language.